

世代交代の大きな波

快進撃が止まらない。将棋界の新星、藤井聡太四段である。最近マスコミでよく取り上げられるので、将棋に興味がない方でもご存じではないか。まだ中学生である。

今年、非公式戦ながら羽生善治三冠を破った対局はとくに大きく報じられた。学生服を着た少年が「あの羽生さん」に勝ったのだから。終局後に羽生氏が、「すごい人が現れたなと思いました」と率直に語っていたのが印象的だった。

羽生氏はかつて名人、王将、棋聖など将棋界の七大タイトルを独占し、永世称号の資格も数多く手中に収めている第一人者だ。この人が昔NHKの小学生将棋名人戦で優勝したときのことを、私は鮮明に覚えている。当時の第一人者、大山康晴名人も番組にゲスト出演していた。坊ちゃんの面影が残る羽生少年に、「おめでとう。君は強いです。そのうちほくも負かされてしまうかもしれない」と言って笑った。

その言葉は数年後に実現することになった。羽生氏は中学生にして史上三番目のスピードでプロ棋士となり、18歳のときの大会では大山、加藤一二三、谷川浩司、中原誠と、当時現役の名人経験者すべてを破って優勝した。

藤井聡太四段のプロ初対戦は今年のクリスマスイブ、相手は加藤一二三氏だった。御年76歳。藤井氏に破られるまで史上最年少でのプロ棋士昇格の記録をもっていた大先輩だ。年齢差62歳の対局として注目された。

藤井少年がみごとプロ初勝利を挙げたわけだが、「若い人の将棋とは思えません。豪快かつ緻密、欠点が見当たらない」と加藤氏は賞賛し、自身は近々プロを退くと表明した。

人事コンサルタント 本田 有明

引き際については公言しない

若手の進出、ベテランの引退という構図は、どんな社会でも見られる現象だ。会社勤めをしている一般の社会人の場合、どんなキャリア戦略を考えておけばよいか。

このテーマについては関連書籍も多く刊行されているので、細かい話は省く。ひとつだけ、引退の時期についてアドバイスを。

①あまり早めに設定しないほうがよい。

②人前で公言しないほうがよい。

たとえば58歳で早期退職して、悠々自適の生活を送る。経営者であれば65歳で一線を退き、次の世代にバトンを託する。そのように人前で公言する人が少なくない。老害にならないように、若手を育てるために、という思いそのものはよい。

しかし現実を見てみると、言ったことを守らない、守れなくなる例がひじょうに多い。会社で「辞める」という言葉を口にする人ほど辞めないものだ、という一般法則は、あなたの職場でも当てはまるのではないか。啖呵は切らないほうがよいのである。

では、どうするか。人生設計あるいはキャリア戦略は、10年単位くらいでゆるく設定しておくこと。そして、「ここで打ち止め」的な発言は人前でしないこと。

アクティブな人生を生きている人には、しばしば運命的ともいえるべき大きな転機が訪れるものだ。思わぬ方向に舞台が動き出すことや、予定より長く打ち込むような事態になることは、長い目で見ればそれこそ日常茶飯にある。

余計なことは人前で言わず、いまやっていることに全力を尽くす。それが最善の生き方だと覚悟を決めておけばよいのではないか。